

前編

イクジバット

exit (pero: i was pure :-p)

小河 彰護

Syogo Ogo presents



イグジット

exit(pero: i was pure :-p)

前編

小河彰護

まだ完成していないので、誰にも捧げられません。

作者

交渉までの時間つぶしに、ぼくは大通りの喫茶店の二階で、くるくる糖蜜を入れた抹茶ラテを混ぜ混ぜしつつ飲んでた。

大きなガラス窓の向こうの景色は薄暗い。盛んに行き交う車も路面も濡れている。雨宿りのためなのか、いつもよりお客が多くて店の中は騒がしかった。

(誰か、仲間を連れてくれば良かった)

と思ったりしたけれど、よく考えたら、ぼくにはお茶するような仲間なんていなかった。もっとよく考えたら、人工無能のペロちゃんが家にあるコンピュータで寝ているはずだったので、万能携帯《スマートフォン》で呼び出して、会話《チャット》でもすることにした。

『ペロちゃん？』

小さな液晶画面をべたべた押しつつ、プログラムあてに文章を送信すると、五秒くらいたってから、

『pero: hello?』

返信文が届いた。

『いまぼくはとても暇です。』とぼく。

『pero: どうして暇ですか？』

『ひとりだから。だからつきあってください』

『pero: 結婚を前提ですか？』

『その辺は任せるので、ちょっとぼくとチャットして』

『pero: はい。好きにしてください』

『うわあお投げやり』

『pero: 何について話しますか？』

『うーん』

何も思いつかなかったので、

『ペロちゃんについて話しましょう。なんでペロちゃんって言う名前分かる？』

『pero: おまえが決めた名前なので、知りません』

おまえ呼ばわり……。

『おまえは何故だと思えますか？』言い返す。

『pero: ペロ は日本語では、オノマトペとして多用される言葉です。おおよそ、舌と、食欲と、性欲にまつわる表現です』

『pero: したがって、日本人であるおまえが着想したときは、わたしが、文字チャットのためのアプリである、という点から、舌、からの連関で着想したように願います』

『願ってるの？』

『pero: わたしは純粹でした』

『残念。本当は、ぼくんちで昔飼ってた、車に轢かれたポメラニアンの名前からとったん』

『pero: わたしはポメラニアンで、車に轢かれて死にました？』

『そうです。で、人工無能に転生したのが、おまえです』

『pero: という設定でした？』

『そうです。』

ぼくは思わず鼻で笑って、一気にカップの中の抹茶ラテを飲み干した。『設定とか言っちゃ駄目でしょ。冷たいね、おまえ』

『pero: わたしに温感はありませんが、いち機能《アプリ》として、おまえのサーバーを壊さないよう、低い機内温度が続くことを願います。したがって、間接的に、ありがとうございます』

『ちなみに、その犬をべろって名付けたのはうちの母ちゃんです』

『pero: 母ちゃんは由来を知りませんか？』

『知ってると思うけど、犬と一緒に車に轢かれて死んだよ。だから訊くのは無理』

『pero: わたしは母ちゃんでした？』

『はい？』

なんだペロちゃん、意味深だなあ。『うーん、半分はそうかもね』

『pero: そうすると、わたしはいくらか配慮します』

『pero: たかし、ちゃんと食べてる？』

『その台詞、どこから拾ってきたの？』嫌味を鍛えてきただけある。『配慮はしなくていいです』

『pero: では、おまえを冷たくします』

いよいよ非道い。

ぼくが返信をやめて、お冷やで口の中の甘香ばしさをすすいでいると、ペロちゃんから、

『pero: もういいですか？』あろうことか打ち切り要求が。

『良くないよ。ぼくは暇なの。ついでに話題もないので困ってる。なんか話題考えてよ』

『pero: はいはい』

三十秒ほどして、

『pero: 先頃、和歌山科学技術大学のDNA研究所において、ヒトの遺伝子の中の美醜感覚を司る箇所を特定したとの発表がありました。「美人」「イケメン」の概念を操作できる日も近いかも。皆さんはどう思いますか？（引用元/Pahoo! みんなのアンケート）』

『なにこれ』

『pero: おまえはどう思いますか？』

『ああなに、これが話題？』

『pero: もういいですか？』

『良くねえよ』なんかちょっとむかついてきた。『遺伝子のことなんか知らんがな。もっとユルくて分かりやすい話題ないの？』

『pero: はああ』

ため息つきやがった、こいつ。

『pero: おまえは今、どこにいるのですか？』

『んー、サポロの大通りのド・ゴールだけど』

ぼくは画面を見ながら席を立って、そばのウォーターサーバでお冷やをつぎ足してきた。『そ

れが何か？ GPSの位置情報でわかんないの？』

『pero:ただいまド・ゴールでは、「甘草《かんぞう》豆乳ラテ」の発売を記念して、「漢方コラボフェア」を開催しております。（引用元／ド・ゴール official website）』

どうやら、ぼくの状況に見合った話題をインターネットで探しているようだった。腐っても人工無能だと若干感心。

『入るとき見たけど、興味ない』

『pero:おまえは今、働いていないのですか？』

『失敬な。立派な団体職員である』

『pero:団体のほうは放置ですか？』

『無礼者め。今日は外勤で、次の用事まで時間ができてしまったのだ』

『pero:団体名は何ですか？』

ぼくが打ち込んで送ると、一分くらい経ってから、

『pero:検索しましたが、見つかりませんでした』

『pero:まさかとは思いますが、その「団体」とは、あなたの空想上の組織に過ぎないのではないのでしょうか。（引用元／Pahoo! みんなのお悩みバスター）』

『pero:誤送信しました』

『サーバーから消してやろうか？ おまえ』

『pero:もういいですね？』

何その語尾、わざと？

『もういいです……』ぼくは諦めた。『なんかね、今日はすごく、ペロちゃんにまかされた』

『pero:はい。好きにしました』

『うわあお』とぼくが送信したところで、

うきゃあ、と女性の悲鳴が聞こえて、フロア全体が一斉に静まりかえった。

パチン、バチン、何かが破裂する音が相次いでして、火事、火だ、と老若男女の怒号が飛び交う。

反射的にそちらに首を向けると、こちらへ後ずさったり逃げてきたりする客たちの奥で、人三人分くらいはあろう火柱がごうごう膨らんで、食器やトレイの返却カウンターを飲み込まんとしていた。天井の火災報知器から、すぐにけたたましい電子音が撒かれる。

消火器持ってこい！ 消火器は！ と複数の男が怒鳴る中、大半のお客はさっさか一階への階段に殺到した。店員は来られないのか来れないのか、声すら聞こえない。急な一大事に若干ぼくは惚けていたけれど、我に返ってすぐ勘ぐったのが、

（テロじゃないか？ これ）

ということだった。

ぼくが子供の頃なんて、この国はバスジャックすらろくに起こらなかった。毎年国会議員が暗殺されたり、何とか神宮や天満宮で自爆者が出るような、きな臭い世の中になるなんてつゆも思わなかった。ところがまあ。

今は、こんな風に不自然に火の手が上がったら、テロリストが仕掛けた起爆装置が動き損ねた

のじゃないか、ほっといたらダイナマイトに引火してドオンじゃないか、そう考えてその通りになっても特に奇天烈じゃないのだ。世紀末にはほど遠いけど、とっくに世は末である。ほんともう。

なので、ぼくもほかのお客同様、とっとと避難したかった。

うっすらフロアの空気が熱くなって、煙で黒く霞んでくるなか立ち上がったぼくは、すぐ目前の上方に、見慣れた緑色のマークがぼんやり光っているのに気づいた。

非常口を示す正方形の誘導灯だ。

当たり前ながらその真下に、地味なドアがある。まさにこういうときの為のものだろうに、集団心理のせいかなのか、誰も使っていない。

(なんだ、ここから逃げればいいじゃん)

誰かが転んだのか、下でも火の手が上がっているのか、階段の人だかりが立ちんぼで騒然となっているのを尻目に、ぼくはそそくさ非常口のドアノブに手を掛けて、開いた中の暗がりに飛び込んだ。頭の中の修羅場に、消火器が薬剤を噴き出す音が威勢良く走った。

非常口の向こう側はとにかく光が乏しくて、いっこうに闇以外見えなかった。

ドアが閉まる音を合図に、背後の阿鼻叫喚が突然聞こえなくなったので、思わずぼくは振り返った。

鼻の先の、先の先までしんとして、なんの気《け》も感じられない。

そうしてぎょっとしたまま動けずにいると、じきにじわじわ、じわじわと、淡い光が足下から浮き上がるように染み出した。目が慣れてきたのだ。入ってきたドアや、周りの空間の形がおぼろげに分かってくる。

少々胸をなで下ろしたぼくは、おもむろに向きを直してまた、ぎょっとした。

そちらには、遙か遠くまで続く、一本道の廊下しかなかったからだ。

両手を広げても少し余るくらいの幅にぴったり固いカーペットが敷かれ、壁の左右、膝下くらいにある白地の誘導灯が、あの非常口のマークと矢印の緑を浮かして、点々、点々と、先の先の奥まで、静かにぼくのことを促していた。何となく、東京《トキオ》に出張したとき飛行機から見た、夜のハネダ空港の滑走路を思い出した。

けど思い出している場合じゃなかった。

どう考えても、その廊下は異常だったのだ。

平日のくせに普通の照明が点いていない。なのに誘導灯は二メートルもない細かな刻みで付いてある。ひとの物音がしない。なのに外の様子も全く耳に入らない。窓一つない。というか、というか、

何故にこんなに長いのか？

ざっと見て、か弱い灯りは足下から、何十メートルも先まで平行線を描いている。下手すると百メートルありそうな気さえした。確か、ここ近辺の区画の一ブロックがそれくらいの距離なので、この廊下がある建物は、どどんと区画の一辺をぶっ潰して建っていることになる。そんな建物、この大通りには多分ヤバ田電機くらいしかない。そしてここは絶対ヤバ田電機じゃない。チェーンの喫茶店が入った、ちびな雑居ビルだ。

それでようやく思い至った。

(ここ、なんかやばい)

思うより先に背筋がざっと凍り付いて、考えなしにぼくは、ついさっき通ったばかりの真後ろのドアを大至急、引き開けた。

途端の明るさに眩んだ目を右腕でかばっていたら、そよ風と、喧噪のこだまが届くのを感じた。セキレイのさえずりを聴きながら、おそる、おそる、その腕をのける。

つま先の先がなかった。

「うひええっ！」

とっさに変な声を出して、ぼくはのけぞった。

正確に言えば、ドアを開けた先には全く足場がなかった。真下の草もない更地まで、気持ち四階分くらいは落差があって、飛び降りると、四分くらい藻掻いてから死ねそうだった。

解体中なのか、更地の反対側にがれきの山ができていて、それを二台の汚れた重機がいじっていた。辺りは団地に、団地で、団地だった。

あと良い天気だった。

ぼくは夢中でドアを閉めた。また真っ暗になった。

(やばい。やばい。やばい。やばい。やばい)

意味が分からなかった。真っ先に思い浮かんだのが「ポルナレフ」の五文字なくらいの混乱ぶりだった。

喫茶店の非常口から出たら、馬鹿長い廊下に入って、同じ非常口を戻ったら、ニュータウンの解体現場に出たわけなのだけれど、何回自分の中で整理しても、全然訳が分からない。

ぼくは再度そのドアを開けてみた。

落ちて死ぬには良いお天気だった。

ドアを閉めた。

(やばいやばいやばいやばいやばい)

どうにかしないと、とは思ったが、まず、いまおのれがどうなっているのかが分からなかった。同僚にヘルプを頼もうとも思っても、そんなんだから頼みようがないし、警察を呼ぼうにも、むしろ連行されそうな勢いだし、救急を呼ぼうにも、とぐるぐる必死に思案していたところで、ぼくはぴぴぴんと来た。

(そうか！ 発狂したんだ！ ぼく)

何はともあれ、おのれが狂っているんなら、なかなか結構合点がいくのだ。職場のひとはみんないいひと達だし、仕事にも不満はないつもりだけど、きっとぼくは凶太い方ではないから、いろいろ公私で無理をしていて、それが一気に祟っちゃったのだろうと考えた。なあんだ。

ぼくは心底納得して、精神科へ強制入院すべく、握りっぱなしだったスマートフォンで自ら、通報することにした。

(「ちょっと発狂してます。すぐ来てください」とか言ったら、救急車来るんだろうか?)

(いや待てよ、さっきの解体現場から飛び降りようとしてることにして、やっぱり警察に来てもらおうか?)

――九番と――〇番で迷っていたら、何だか愉快になってきて、無性にペロちゃんとやりあいたくなった。チャットのアプリを立ち上げて、

『やあやあペロちゃん』と呼びかけると、

『pero: 爾好《ニイハオ》?』

挨拶がいつもと違った。

『なにそれ、中国語?』

『pero: 読めないのですか?』引き続き刺々しい語調。

『今から短歌を詠みます』とぼく。

『pero: どうして今、風流ですか?』

『馬鹿だねペロくん。今や短歌はちょっとしたポエムなのだよ』後から読むと恥ずかしい発言。

『pero: つまり、風流ではなく、私的ですか?』

『おお、わかってるじゃんかペロくん。では一句』

『非常口 くぐってみれば ポルナレフ そうだ今日こそ 発狂記念日』

送信後、若干間があって、ペロちゃんから、

『pero: ポルナレフ が理解を邪魔して、豊かな感想を述べられません』

『pero: おまえが発狂記念日、ということですか？』

『イエス！ ぼくが発狂記念日！』

恥ずかしい発言二号のあと、ぼくは人工無能にここまでの顛末を丁寧に説明した。

『もう幻覚だよ幻覚。物理的にあり得ないじゃん。今日が発病日だよ。記念すべき。覚えとい
てね！』

『pero: 確かに、物理的に、不思議ですね』

ペロちゃんは珍しく素直に反応した後、こう返した。

『pero: 時速五万キロで江蘇省《こうそしょう》に着くなんて』

ぼくは発狂しているつもりだったので、文章が意味不明でも気にしなかった。

『なんかペロたんのいってることわかんねえけど、とにかく、パトカーか救急車を呼ぼうと思
います。どっちがいいかな？』

『pero: 物狂い相手ならば、どちらでも、さして変わらないでしょうが、どちらにしろ』

『pero: まず、通訳を確保する必要があります』

『え？』

『pero: 中国語をスマートフォンの送話口に向けて発し、駆けつを要請することができる装置
、または人間が必要です』

『なんで？ 何いってんの？』ぼくは頭がおかしいなりに、いらついた。『何故にチャイニーズ
ではなさなあかんの』

『pero: 発狂記念日を迎えたおまえは、おめでたく、置かれている立場の理解のために、すぐにマ
ップのアプリを立ち上げて位置情報を知るべきです』

「あ？」

ぼくは思わず声を出して、そのおかげか、若干冷静になった。

しゃくではあったけども、ペロちゃんの指示に従って、スマートフォンの画面を地図アプリに
切り替えた。廊下にいるとうまく現在位置が認識されなかったので、GPSの電波を受信しやす
いように、ドアを少し開けて隙間からちょこんと一分強、スマフォを外に突き出してみた。そ
ろろ特定できただろう、と思ってひょいと画面を見ると、変な知らない漢字ばかりの地名の中
に、現在地を示す青丸が明滅していた。まさか、と思って地図の縮尺を縮めていったら、

【江蘇】

という文字が現れて、もっともっと縮小していくと、どでかい大陸の中に、

【中国】

の文字がばばんと出てきた。

それでぼくは、何故ペロちゃんがニイハオとほざいたのか、ようやく理解した。理解はしたが

、

「はああ？」

まだ信じられずにたまらずドアを開けて、もう一度外を見た。

景色は変わらない。変わらないでいて、よく考えると、あまりにも周りの団地の棟数が多すぎた。少し埃っぽい青空の下、同じ淡泊な色かたちした建物が、どこまでもどこまでも整然と並んでいて、所々等間隔に、角張ったビルが三つ四つ飛び出している。こんなくそでかい計画都市、日本にないし、極めつけに、あちこちから目に入るネオンなり看板なりの文字が全部、漢字で、漢字で、漢文だった。

「すごく、チャイナ……」自分に言い聞かせるように、

「チャイナ、うーん、チャイナ、」何度か呟いて、意を決してから、

『ぼくは、もしかして、チャイナにいるのですか？』

ペロちゃんに敬語で訊いた。

もちろん敬語で、返事が来た。

『pero: 受信したGPSデータによれば、そうです』

『pero: 中国、江蘇省、揚州《ようしゅう》市、カン江《こう》区、に、おまえがあります』

『うわあおう』

つまりぼくは、狂っていようが、いまいが、中国に滞在中なのだった。

少なくともぼくの中では。今。

これは大変に厄介だ。ドアの向こうが妄想であるにしろそうでないにしろ、中国語が喋れないはずのぼくが町人のみなさんと綺麗に意思疎通するのは無理々々に違いない。その辺を歩いているこれまた淡泊な服装の人々がどんなに優しくしてくれたり、逆に恨みをぶつけてくれたりしてくれても、おそらくイィシャンペェペェ、とか、そんな感じにしか聞き取れないだろう。

もっと言うと、ぼくは英語もからきし駄目だ。

さらに言うと、ぼくは中国人に良い思い出がない。

駆け出しの頃、二回だけ、先輩のお供（本部への報告関係とか、雑用）で中国（ホンコンとシャンハイ）へ来たことがあるが、ビジネス相手が何故だかことごとく、くず野郎だった。物資の大量買い付けの交渉をしたのだけれども、どちらの輩も声でかいし、態度もでかいし、話の中身までわやくちゃで。

まあ挙げればキリがない。事前の打ち合わせ無視で三倍以上売値をつり上げられたり、あからさまに品物に違う物が混ぜられたり（その場で箱から出してみたら、砂袋で誤魔化してた）、人民警察を使って拘束してやると脅されたり、眠剤を盛られて這い逃げたり、硬く冷たく長くて大きなライフルを三丁突きつけられたり、なんかそんなことばかりだった。特にシャンハイからの帰りの船では、向こうの関係者全員がお亡くなりになりますように、としこたま呪ったものだ。

なので、とにかく、もう、中国が、もう、すごくトラウマなのである。

善良なはずのその他中華人民へお詫びしつつそっとドアを閉めた後、ぼくはスマートフォンの画面に目を落とした。相変わらずのペロちゃんが、

『pero: 思い知りましたか?』なんて垂れている。

『pero: なお、この地域に関しては、キノコモバイルの海外パケット定額の適用になりますので、どれだけ4G通信を行っても日額千四百八十円の料金しか発生しません。ご安心ですよ!』

ぼくはその嬉しくないフォローを無視して、ひとつ深呼吸してから、人工無能へ訊いた。

『今の年月日と時間は』

『pero: わたしのですか? おまえのですか?』

『おまえの』

『pero: 20xx/05/28 16:37 をお知らせします。』

ぼくが喫茶店で退屈していたときから、十分ちょっと経ったくらいだ。無論スマートフォンも同じ時刻を表示している。なるほど、確かにこれではサポロから中国まで数千キロ? をぼくが音速越えて移動したとしか思えない。

『ぼくは中国ではなく、日本の精神病院へ入院したいです』

『pero: さっきも言いましたが、通訳を雇えばどうなんですか?』

『中国人とは二度と会いたくないの。だからここから出たくないの。そしてここには誰もいな

いの』

『pero:そこはどこですか?』

『知らない。良く分からん建物の、廊下』

『pero:いえ、環境を訊いたのではないです。所在地はどこですか?』

『中国のなに、ヨウシュウだっけ、そこにいるんでしょ?』

『pero:いえ、現在、おまえが地球のどの辺にいるのかを訊いています。どこですか?』

何言ってんだこいつ、と心底思った。

『おまえが中国にいるって言ったんだろが。馬鹿なの? 死ぬの?』

『pero:現在の位置情報を確認できないので、現在のおまえの所在地が分かりません』

『室内だから電波届かないんでしょ。プログラム壊れたんじゃないのおまえ』

『pero:わたしが判断していることは、その室内空間がきわめて特殊ということです』

『まーそうだろうね。すごい長くて、暗い廊下』

『pero:いえ、そういうことではないです』

さんざん否定しくさってから、ペロちゃん、急にめんどくさい解説を始めた。

『pero:現在、わたしは、おまえのスマートフォンのモバイル通信によって、おめでたいおまえとチャットをしています。そして、モバイル通信回線を利用するためには、おまえのスマートフォンが最寄りの回線基地局に無線接続する必要があります』

『pero:このことから、逆説的に、おまえのスマートフォンは、現在この瞬間も、特定の基地局に無線接続していることになります』

『pero:したがって、かりに何らかの障害によりGPSデータが入手できなかったとしても、おまえのスマートフォンは特定の基地局がカバーする範囲内にあるのですから、その基地局の位置をもって、おおまかなおまえの位置情報が暫定できなくてはなりません』

全然頭に入ってこないので、三回ほど読み直していると、

『pero:もういいですか?』

『ちょっとちょっとちょっと』 どんだけサディスティックなんだよ。『えーと、ぼくのスマフォが、この廊下だと、どの基地局に繋がってるか分からないってこと?』

『pero:もういいですね?』

『いやいやいや』

もはやプログラムじゃなくて、単にサドな人間とチャットしてるような心地だ。『電波強度の表示、棒がびんびん五本出てるよ。なのに分からないって?』

『pero:分かりません。したがって、知りません』

まあ、その、そうなんだろう。

『pero:ですから、わたしは、おまえがちゃんとお近くのドアを開け、中国にて身柄を拘束されるために、可能な限りの方法を駆使し、通訳を確保することを、最善の方法としてさっきからご提案しています。いかがですか?』

まあ、それも、そうだろう。ここで確かなことは、ペロちゃんの言うとおりに、目の前にチャイナへの出口があることだけなのだから。

けれどもぼくは、発狂しているつもりだったので、どうしてもそうするのを許せなかったのだ

った。多分きつとそうだ。で、

『却下します』

と言ってやった。

『それ以外の方法を無能の限りを尽くして検索模索し、ぼくに提案しなさい』

『pero: うわあお』

真似された。

それから正味一分ほどじらされた後、

『pero: いくつかご提案できることがあります』

ペロちゃんが吉報をよこしてきたので、早速プレゼンを命じた。

『続々とご提案なさい。巻きで。』

『pero: okay』

『pero: 一つ目。わたしにサーバーからメールを発信する権限をおまえが与え、わたしがインターネット上のプログラムで変換した中国語テキストにより、わたしが、おまえを保護するよう、中国人民警察あてにメールを送信する』

『おまえ、ぼくが無事帰れたら初期化《フォーマット》の刑な』散々こっちが中国嫌いって言うてんのにこれだもん。『それはそれとして、次の提案どうぞ』

『pero: 二つ目。一つ目と同様の内容を、おまえが、江蘇省揚州市を管轄する、日本の上海総領事館あてに、電話、ないしメールで発信する』

(ああ、そっか。大使館的なとこに助けてもらえりゃいいんだ)

さすが人工無能、シンプルで合理的なアイデアだ。いかれたこちらとは筋が違う。

その話乗った！ と画面に入力しかけて、ぼくははたと気づいた。

パスポート持って無《な》かとよ。

(ふほうにゆうこく！) 思い切り、平仮名で脳裡に浮かんだ。(不法入国してんじゃん、今！)

面倒な話になるのは確実だった。なにせ、ついさっきまで北海道《ホカイドウ》のサポロにいたぼくは今、中国側日本側、どっちから見ても出国手続きすらしてない密航者と変わらないのだ。蛇頭《スネイクヘッド》とか、国際的犯罪組織の末端だと真っ先に疑われること間違いなく、そうすると、ぼくの身辺も徹底的に洗い出されるだろう。

何はさておき問答無用で逮捕されちゃうはずだから、ぼくとしてはまずまずの結末にはなるけれども、これじゃあ、父ちゃんをはじめ親族や、職場のみんなに降って湧いてかかる迷惑のレベルが強制入院とは桁違いだ。いくら何でも躊躇われる躊躇われる。

頭を抱えたままぼくが何も返信しないので、ペロちゃんが勝手に提案を続けた。

『pero: 三つ目。出口から飛び降りて死ぬ。(おまえの思想によっては、合理的な選択肢となり得ます。確実を期すため、頭から着地すること！)』

『もうあれだ、ペロちゃん、開き直ってるでしょ？』感動すらしてきた。『いまのところ、ぼくは死にたくないです。はい次』

『pero: 四つ目。おまえがいるという「廊下」を突き当たりまで進み、それまでに別の出口があれば、その出口を開ける。(出口の先が、「中国江蘇省揚州市カン江区でない場合」は、いわゆ

る「イグジット現象」の可能性が示唆されます)』

「はあ。はいはいはいはい」思わず声に出した。「全然探検もくそもしてなかったもんな、ここ」

何だかんだ言って、現状のぼくはドアの前でおろおろしたまま、おのれが放り出されているこの気色悪い空間のことをちっとも調べずに、ただわめき散らしてるだけなのだ。狂ったら狂ったなりに、やれることはちゃんとやらねばと多少反省。

『それいいね。まず、それやります』

送信してから、ペロ氏のテキストを読み直してみて、ひとつ引っかかったことがあった。

『ところで、その「イグジット現象」ってなに？』

『pero: イグジット現象（イグジットげんしょう、英語: exit phenomena）とは、都市伝説において用いられる架空の概念。20×0年代SF作品にモチーフとして多用された。諸国における「謎の失踪事件」（日本で言うところの「神隠し」）がインターネット上で共有される中で誕生、発展した、いわゆるネットロアの一つである。一般的には、「人間が、ある空間からの『退場（イグジット）』を契機として、物理的に不可能な長距離間移動（ワープ）に『連続して』巻き込まれること」を現象の定義とし、遭遇する確率はおよそ五百万分の一〜一千万分の一とされる。』

『pero: 当初は、アメリカの神経科学者で哲学者のエドワード・マイケルソンが提唱した「拡散する未来」モデルの第一段階において、近未来に人類が直面することになると予想される状態（任意の二つの空間の連結を担保する「出口（イグジット）」を、「経験の孤立化」の閾値を超えた個人が一時的に「解釈」できなくなり、認識の「恣意性」が極限まで高まること）を指す通称であったものが、前述のような不可解な失踪の説明のために転用されて普及したものと考えられている。（引用元／イグジット現象 - WikiPUdia）』

全然頭に入ってこないので、五回は読み直したあたりで、ようやくぼくは「架空の概念」という文字に気づいた。かくうのがいねん。

『ペロちゃんこれなに、うそ現象ってこと？』

『pero: 学者が提唱している現象です』

『や、そうらしいけど』間違いじゃないけども。『ウィキの冒頭に思いっきり、架空だって載ってるんだよね？』

『pero: 実際にあった失踪事件を説明する、現象です』

『屁理屈だよな？』ぼくはつい、二回送信した。『屁理屈だよな？』

人工無能の弁明はさておき、ほかの出口を探せという指示自体はまっとうだったので、ぼくはとにかくその場を後にして、延々先へ続く廊下を歩き始めた。

墨の中のような視界で、相変わらず、誘導灯だけが目下を黙ってエメラルド色に照らしていた。踏みしめるカーペットは適度な堅さで、新しめのオフィスビルのようだった。

『pero: わたしの提案は、現実的と思われたものから昇順です』

『んーと、そうすると、そのイグジット？ は、死ぬよりふざけたアイデアってこと？』

『pero: そうDEATH』

（また『うわあお』って打ってか？）

決まり文句みたいになるのが嫌だったので、どう返すか少々考えた。考えて、

『きわめて遺憾DEATH』

『pero: もういいですか？』無視された。

『いけないDEATH!』プログラム相手に憤怒するぼく。『某《それがし》はしばらく廊下を捜索してるから、貴様は残りのご提案を延々垂れ流しやがれ！ 巻きで!』

『pero: okay』

その澄ました返事を見た後、ぼくは鼻息荒く顔を上げ、しきりに首を振って左右を確かめながら、ずんずん廊下を進んでいった。壁面はのっぺりしたパネル仕上げで、細いつなぎ目はあるものの、それ以外何の変哲もなかった。

スマホが振動《バイブ》してペロちゃんの返信を知らせたので、一応見てみる。

『pero: 五つ目。おまえがいるという「廊下」を、おまえが、スマートフォンのカメラ機能で撮影し、おまえ、ないしわたしが、インターネットにて類似画像検索を行い、検索結果があれば、類似画像掲載元のウェブページの情報から現在地、ないし現状を推察し、それを受けておまえが、再度わたしに打開方法の検索を命ずる。（※なお、わたし自身には画像の解析機能がありません）』

（画像検索ね。その手もあったか）

今や、その辺のひとが持つてるバッグをこっそり撮影して検索をかけると、それがどこメーカーの何て製品なのか、八割方分かっちゃうような時代なので、やってみる価値はあるかなと思った。

ぼくはちょっと立ち止まって、カメラアプリに画面を切り替えたスマホで幾度か、正面に向けてパチリとやった。場所が暗いせいでノイズまみれだったが、まあ感じはつかめるような画が撮れたので、保存して、ついでにペロちゃんへ送る。

『さあどうだ、検索してみろ→画像(img_0099.jpg)』

『pero: 六つ目。』

無視された。

『pero: 非現実的な事象に親和的と思われるインターネットユーザーの多数アクセスがある交流型ウェブサイトにて、わたしではなく、人力による検索を試みる。（例・「2ちゃんねる」内の相応の掲示板へ、「【異常事態】十分前札幌にいたのに今中国wwwうひwww【助けて】」等、目を引くタイトルで議論《スレッド》を立ち上げ、助言を請う）』

無視されたあげく、プレゼン内容までもう何というか、さじを投げた感でいっぱいになっていた。いや、人工無能プログラムに期待をする方がおかしいと言えそうなのだけでも、どこに投稿したって、「精神病院行け」で終わること請け合いだ。仮に、話に乗ってくれる学生や妖精《ニート》がいたとしても、この状況への良いアドバイスを短時間でくれるわけがない。

（ん？ というかぼく、工作中だったじゃないか。交渉の時間何時だったっけ？）

『pero: 七つ目。寝る。（おまえが、明らかに辻褄を欠く状況にあり、かつ、発狂していない場合、この返信《リプライ》も含め、全てがおまえの夢の中で展開している可能性があります。このことから、いったん現在の意識を断ち、いわゆる「夢オチ」への帰結を試みるものです）』

交渉は、本部にて十八時からの予定で、今、十六時四十分を過ぎていた。

『どっちみち、交渉にマニア湾じゃん！』焦って誤変換。

『pero: 現在のところ発信できるご提案は、以上です』

『間に合わんじゃん！』

『pero: 精神病院に入院するので、今日の予定はキャンセルでは？』

『ああそれもそうか』

納得しかけて、

『いや違う違う！　ぼくが狂ってるなら狂ってるで、あと一時間二十分かそこらで緊急入院の目処をつけて、救急車の中とかからチーフに詫びの電話を入れなきゃいけないの！　逆にこれが万が一にもマジ話なら、やっぱり一時間二十分かそこらでサポ口にもどんなきゃいけないの！　どっちも無理じゃん！　どうすれってよ！』

『pero: どうしようもないから、まずは、ほかの出口を探していたのでは？』

「え、あ、はい」

今度はすとんと納得。『そうDEATHた』

気を取り直して、ぼくは廊下の調査を再開した。さっきよりも慎重に進んで、壁や床に仕掛けがないかいちいち探ったりしてみたけれど、どこを触っても至って普通で、ノックの響き具合にも大差なかった。鉄筋コンクリート造の建物かな、ということぐらいしか分からず仕舞い。

五、六分くらい後にまた、スマホがバイブした。

『pero: 先ほどおまえに命じられた、画像検索についてですが』

『おお』実は無視してなかったのか。可愛いやつめ。『なんか見つかった？』

『八件ほど、類似の画像が挙がりました』

『うひょい！』興奮する。

『pero: ただし、掲載元ウェブページの文脈《テキスト》から推察するに、絵空事《フィクション》の図画（イラスト、または、漫画、または、アニメの静止画《キャプチャ》）と思われます』

『うひょい』落胆した。

『pero: また、特定の地域を示唆するような文言は見当たりませんでした。（なお、ページの言語は八件中七件が日本語、残る一件は不明）　念のため、見せつけますか？』

『けっこうDEATH』どうせウェブ漫画かなんかのワンシーンだろうと思った。

『pero: しかしながら、驚くべきことに、それらの画像は、』

『はい？』

プログラムのくせに「驚く」なんて単語を使ってもったいぶるので、ぼくが眉をひそめると、人工無能はこう続けた。

『pero: ウェブページの文脈からして、「イグジット現象」をテーマに掲載されています』

（いぐじっとげんしょう）

内心で反芻したあと、ぼくはさっきペロちゃんが引用してきたウィキの記述を思い出して、そして、目が点になった。

『つまり、どゆこと？』

『pero: これから、WikiPUdiaの「イグジット現象」の項より、関連すると思われる箇所を抽出し、引用します』

『pero: 各国におけるイグジット現象の言説の相違・日本　他の東アジア諸国と同様、現象発生の契機を「非常口からの退出」に限定している。それに加え独特なのは、初回のワープ、最終回のワープ地点が「非現実的な空間（ex. 千本鳥居の中、数百メートルの通路、森の上空、暗闇そのもの、等）」であったと語られることが多い点である。これは、日本では「神隠し」における「神域」を解釈するものとしてイグジット現象が取り入れられたことにより、元となるエピソード

が有していた民間信仰や通過儀礼のモチーフと混ざったためだと考えられている。』

『pero: 引用終わり』

『うん』四回は読んだ。『で、どゆこと？』

『pero: この記述に着目し、わたしが、「イグジット現象」「非常口」「通路（または廊下）」というキーワードで文書検索したところ、インターネット上に、日本語で三百四十八件の検索結果が挙がったので、おのおの内容を精査した結果、わたしにとっては、約七三．五％（二百五十六件）のウェブページについて、「何者かが、（先ほどおまえが説明した）おまえの現在の状況と、同等の状況下に置かれた」という文脈である、と判断されました』

『うん』

大体ペロちゃんの言いたいことが分かったような、分からないような、分かりたくないような、どっちつかずの心持ちで、ぼくはうつろにスマホの画面から顔を上げた。

廊下の奥の、奥の、奥の方にぼうっと、突き当たりが見えた。そしてそこには、四角い緑色のランプがあった。

喫茶店の非常口のドアの上にあったのと、同じ誘導灯だと思われた。

『pero: したがって、わたしは、おまえが、今、「イグジット現象」に遭遇していると暫定します。（これは、自身が発狂している、という、おまえの主張を否定しません）』

『pero: よって、先ほどわたしが提案した七つの方法のうち、「四つ目の方法」を、現状もっとも現実的なものであると謹んで訂正し、おまえにその試行を、強く推奨するものDEATH』

非常口の姿形がはっきり近づいてくるにつれて、耳の裏側からぼふ、ぼふ、と痛いくらいに、自分の鼓動が出しゃばってきた。

恐れ混じった緊張をしているのを感じる。

そこには、歩いてきた元にあったのと同じ木目調のドアが、確かに間違いなく、けれども、冷めた緑一色だけの光を浴びて、死んだように構えてあった。

『別の出口が、廊下の突き当たりがありました』

『pero: その出口を開けることを勧めます』

『pero: あるいは、通報しますか？ スレ立てしますか？ または寝ますか？』

『ペロちゃん』 ぼくの考えは決まっていたので、

『pero: yes?』

『ぼくは妖精《ニート》ではないので、それは愚問です』

せめて格好つけてみた。するとペロちゃん即座に、

『pero: それじゃあ！ さあ！ 張り切って！ どうぞ！』

『なんでいろいろやりとり省いたん？』

こっちの意気込み丸潰しだよ。『や、開けます、開けますよ。ただし、こそっとね。こそおと。ちょおとずうつ開けちゃうから』

送信してぼくは、その次なる非常口の一步前を踏んづけた。

『pero: さぞかし滑稽です！ すてきの予感が！』

『ペロちゃん、もう無理しないでいいんだよ？』 耐えかねて言ってしまった。『実はプログラムが返事してるんじゃないって。人間だって。ばらしちゃいなよ。全然怒んないから』

『pero: わたしを煽る暇があるなら、おまえはとっととそこから出ては？』

「うっせえよ」

かっとしたぼくはそう発して、ひと思いに金色のドアノブレバーを掴んで、下げた。

こそおとと、ちょおとずうつ押した。

いくら力をかけてもびくともしなかった。

どうも引き戸みたいだった。

いっぺんうな垂れた。元気を出した。

こそおとと、ちょおとずうつ引いた。何故か及び腰につま先立ちの姿勢だった。

ドアはあっさり動いて、隙間から目一杯の白光がわき出してきた。ずずず、と重い腰を上げたように廊下の空気がなぎ倒されて、ちょっとした向かい風になる。人工的に冷やされたような、不自然な感触がした。

のぞき込んでいるぼくの目が慣れるより先に、その白い光景の遠くから何か、音楽が聞こえてきた。

思うにそれは、異国情緒のないものだった。生楽器ではないものだった。電子音楽とも言いにくかった。伴奏のついた歌だった。深みのない女声だった。というより陽気一辺倒だった。ポピ

ユラミュージックっぽかったけれど、全くひねりがなかった。そして何より、歌詞がどう考えても、日本語だった。

♪なんでもうってる たのしいおみせ
なんでもうってる ばくだんいがい
やさいにおさかな おにくにおこめ
おとくなかかくで にこにこえがお♪
(.....こ、)

ぼくはそこまで聴いて、確信して、驚愕した。(この歌は、)

♪ぱままぼくきみ かぞくみんなで
かいすぎはっぴい

「バリユウウウダああックスっ！」

ぼくは嬉々としてサビの最後を絶唱しながら、ドアを跳ね開けた。

その先は、LEDの明かりでみち満ちていた。かすかに食用油の匂いがした。脇にトイレの標識がある短い通路の向こうに、菓子パンか何かが数段並べられた背の低い棚が見えた。その後ろには食料品とおぼしき何かでぎっしりな、背の高い棚がずらっと並び、天井からは、「缶詰・インスタント食品」とか、「調味料・油」とか書かれた看板がいくつも吊り下がっていた。

間違いなく日本のスーパーマーケットだった。

というか、なじみのValuDux《バリュウダックス》だった。余談だけれどここはただのスーパーだから、このイメージソングは詐欺である。爆弾以外にも、おもちゃとか家電とか安全靴とかは売っていない。

「イエス！ イエス！」

ぼくはひとりその場でガッツポーズを連発したあと、異様な興奮の冷めやらぬうちに、スマートフォンでペロちゃんへメッセージを送った。

『ばりゅーきたったあああああああああ』

『pero: 位置情報の取得を再開できました。ただいま確認中です』

『どう見てもバリュウです。日本です。本当にありがとうございました。』

『pero: どういたしまして。位置情報によると、おまえは日本にあります』

『でしょ？ でしょでしょ？』

軽く震えの止まらないぼくをよそに、人工無能は平然とこう返してきた。

『pero: GPSデータによれば、おまえは、日本、東京都、西東京市、にあります』

『pero: 「廊下」から出た先が、「中国江蘇省揚州市カン江区ではない場合」、かつ、「札幌市中央区大通りではない場合」、かつ、それらの「周辺の場合ではない場合」、かつ、おまえもその三点を追認するのであれば、おまえが「イグジット現象」に遭遇していることは、暫定ではなく、どう見ても正式です』

『pero: 本当にありがとうございました。』

「へえ？」

間抜けな声を出してから、ぼくの興は一気に冷めた。そうだ、イグジット現象とかっていう胡散臭いのにはぼくが巻き込まれている、そこいつはさっきからずっと抜かしていて、それによると

、確か、何回かありえないワープを繰り返すとか何とか。いやいや、それ以前に、東京都《トキオト》？

「んなあほな」呟いてから、

『んなあほな』そのままペロちゃんに打った。『バリュダックスって、ホカイドウのスーパーじゃん。トキオなわけないって』

『pero: いえ、その認識は誤りです。バリュダックスは久遠《くおん》財閥の店舗ブランドであり、複数法人により全国展開されています。（根拠／ValuDux - WikiPUdia）』

『pero: 位置情報から検索したところ、おまえがあるのは、バリュダックス西東京店、であると思われる。（いい加減おまえも、マップアプリにしませんか？）』

微妙な日本語でたしなめられたので、すごすごスマフォで現在地を確認する。地図の上では確かに、言うとおりの地名、言うとおりの店名のところに、ぼくの居場所を示す青丸が付いていた（ちなみに、「バリュ」ではないことを今さら知った）。ホカイドウにいたはずの我が身は、わずか二十分、三十分のうちに中国を経由して、今トキオに降臨したというわけだ。

もう「ポルナレフ」もなにも頭に浮かばなかった。交渉の時間にちっとも間に合わない場所にいると考えもしなかった。

『そう。ですね。』

鎮静剤でも打たれたみたいになんか脱力して、

ぼくはようやく一つ理解した。

（これが、イグジット現象か）

イグジット、イグジット、イグジット、イグジット、

頭の中にこだまして止まない中、何とか指を動かして、ペロちゃんに発する。

『どういたしましてそしてごめんなさいそして、どうすればいいですか』

『pero: わたしは、おまえが、イグジット現象を信用し、その言説にしたがって行動することが、おまえの現状の正常化を促進することになると考えます』

『どう行動すればいいですか』

『pero: わたしは、インターネット上において、「イグジット現象」と「解決（および、その辺縁の類語）」というキーワードで複数回の検索を試み、その結果の文脈を解析し、試行すべきと思われる事柄があれば、おまえに、それをご提案することができます。』

『pero: この調査には、およそ八分程度を要しますが、いかがですか？』

『お願いします』

『pero: okay』

ぼくは手汗でべちゃっとしたスマートフォンを、背広のジャケットの内ポケットに突っ込んだ。突っ込んで、しばらくその場で放心したまま、おのれの顔面が脂ぎっていたり、口の中が乾ききっているのに少しずつ気づきながら、バリュダックスのイメージソングを聴き流した。

通路の先の店内で、せわしなくお客や、店員や、カートが横切るのを少々眺めた。

♪なんでもうってる たのしいおみせ

なんでもうってる にんげんいがい♪

「歌詞が、」ふと感じた。「思いっきり、さっきと矛盾してる……」

そして、そんな揚げ足取りくらいしかひらめかずに、あろうことか、人工無能に行く末のことをすがっているおのれのことを考えて、ゆっくり幻滅した。

「……なんか、飲み物、買うか」

気付かけ代わりにガラナサイダーでも確保することにして、ぼくはへなへな売り場へ出て行った。

それとすれ違いで、白い調理帽に緑のエプロン姿の店員が通路へ駆け込んだ。気にも留めずに飲料コーナーを探していたら、背後で派手にべぢいん、と鈍いむち打ち音がしたので、多少気になって見てみると、その店員が思いきりすっ転んだのか、ゴムっぽいタイル床の上でうつ伏せに悶えていた。

周りにつまずきそうな箇所は見当たらず、このひとが勝手に足をもつらせたようだった。大丈夫ですか、と声が出かかったけれども、大怪我でもあるまいし、助け起こすのも大げさな気がして、結局無駄にその場でおたおたしていた。

案の定、店員はそのうち自力で壁を頼りに半身を起こして、こっちを向いた。

茶髪の若い女性だった。

「すみません」

ものすごく鼻から流血していた。

「すびばでんっ、あど、でいっぶ、びいっ……」

「 」

小綺麗な面《つら》との落差に唾然としていたぼくは、

「んあ、はいっ」数秒経ってから、やっと慌てて駆け寄った。「ティッシュ、ティッシュですね。えーと、」

ジャケットからポケットティッシュを出して、引っこ抜いた何枚かを彼女に渡してやる。「大丈夫ですか、あの骨、鼻の骨とか、大丈夫ですか？」

「ずびばへる、ばいぼぶで、ばいろるべ、」

店員は座り込んだまま真っ赤な顔に涙目でぶんぶん頷きつつ、受け取ったティッシュを使ってごしごし顔をぬぐったり、鼻を押さえたりしていた。二、三分ばかりそんな風にじっとして、大体落ち着いたのか、

「うん、」鼻声でまた一度頷いて、こっちへ頭を下げてきた。「ほんとに、すみませんでした。ありがとうございました」

「ああいえ、大丈夫なら何よりで」当たり障りなく返す。

すると、急に向こうが目を見開いて、何故か食い入るようにぼくのことを睨んだ。そしてそれから、何段階か声を低めて、出し抜けてこう訊いてきた。

「……もしかして、稲妻《いなづま》？」

ぼくの氏名は、よく言えばまずまず格好良く、悪く言えばそこそこ可笑的い。

その名も稲妻孝史くん。

一見、わりかし古風な堅い名前で、ぼくも字面に好き嫌いはないのだけれど、読み仮名が「イナヅマ・タカシ」である。語尾へいろいろ付けて音読してみたりすると、これがじわじわ来る。

イナヅマタカシくん。

イナヅマタカシさん、診察室へどうぞー。

イナヅマタカシ容疑者。

イナヅマタカシ砲。

お天気関連のマスコットキャラクターを襲名できそうな、なんかこう、無駄に薄っぺらいインパクトがあるのだ。要はこれが、ぼくの些細なコンプレックスになっていた。小、中、高と、変なあだ名を付けられることこそなかったけども、年に数度、嵐の日になると決まって誰かが「雷博士」の濡れ衣をかぶせてきたものだ。

それはともかく。

この店員は不思議ちゃんでなければ、ぼくを見て、ぼくの苗字を口にしたわけなので、ぼくのことを知っているに違いなかった。ところが、肝心のこっちは全く、その血まみれティッシュまみれの顔に覚えがない。ので、

「いなづ、ま？」まずは何となくはぐらかした。

「稲妻でしょ？ あんた」やはり彼女はぼくの顔見知りなようで、「全然変わってないからすぐ分かったわ。ほら。あたし。分かんない？」

「確かにぼくは、稲妻だけど」一通り見直しても、記憶がよみがえってこない。「……んー、顔と名前が、一致しなーいー、かな……？」

「なに。忘れられてんの？」軽く責め笑いしてから、店員はあっさり名乗った。「リントウで一緒だった、ゴヘイ。ゴヘイトモミ。思い出した？」

「ごへい、」

ぼくに負けず劣らず珍し目な苗字だったけれども、すぐにはぴんときない。リントウというのは、ぼくの卒業したホカイドウの高校の略称で、彼女はどうもそこの同窓生のようなだった。

「二年生と三年生の時、同じクラスだったしょ。ほら、そのときあたし、まだ眼鏡かけてて、赤いフレームの……」

「……んあー、」

いろいろヒントが出てきたので、頭をフル回転させて当時の情報をほじくり返すと、不意に何かいろいろ繋がって、ぴかっと脳内の電球が灯った。

「ああ、はいはい！ いたね。いた。赤い眼鏡の御幣《ごへい》さんね。いたいた」

「ほんとに思い出した？」何故か疑われる。

「ピアノ、超上手かったひとでしょ？」

「うん、まあ、そう」

何故か反応が微妙なので、もうひとエピソード出してみる。

「あと、英語の谷原《たにはら》に、『なんで外国語なんて勉強しなきゃいけないんですか？』って逆ギレして、授業を一時限潰した……」

向こうがやっと破顔して、嘔き出した。「そう、そう。そんなこともやってたね、あたし」正直、彼女とはそんなに良く知り合っていたわけではなかった。

当時からぼくはさん付けだったし、向こうもぼくをくん付けだったと思う。御幣さんは合唱部で、ぼく稲妻は菜園同好会《さいえんズ》、放課後の接点もない。学校祭とか、調理実習とか、特別な行事で同じ班になったときに軽くやりとりする程度で、好感はあっても好意は持たなかったひとだった。

記憶によると、彼女は、見るからに文化系で地味な出で立ちだったが、眼鏡の色と、しばしばの言動が若干際立っていた。さっき言ったとおりのピアノが激烈に上手くて、確かそういう、芸術系統の学校に進学したという話だったような。

「なんであんた、こんなところにいんの？」と御幣さん。

「あー、んとね、」狂ってるとかイグジットとか言ってもヒかれるだけなので、仕方なくぼくは嘘をついた。「仕事。サポロから出張してんの。こっちに」

「へえ。それでスーツね」すんなり感心してもらえた。「しかしビックリした。本当に偶然だ」「そうだね……」さっき中国からワープしてきた身としては、だからどうとも思えなかった。どっちかという鼻血の方にびっくりだ。「御幣さんはなに、ここでパートしてるの？」

「まあ、うん、そうね」

また微妙な顔をしてから、彼女は少し考え込んで、そのあとぼくに持ちかけてきた。「——ねえ、今、時間ある？」

「時間？ ない、っちゃないんだけど、」100%足せない用事のせいだから、「ある、っちゃあるよ」

「何それ。どっちさ」鼻を押さえながらまた彼女は笑って、立ち上がった。

じゃあちょっとつきあってよ、とぼくはたちまち、出てきた通路のすぐ脇にある、「Staff Only」と書かれた別の扉へ促された。展開がまたしても唐突で、当事者なのに置いてけぼり感満載。

「か、勝手に入って、良いの？」

「良いんだよ、別に」どこか投げやりに返される。「どうでも良いんだよ」

「はあ……」

ちらちらとその両開き戸を眺めた限り、そばに非常口の灯りはなかったけれども、ぼくの中では、ここまでのことでとくに理屈がぶっ飛んでいたもので、もう、出入口が非常だろうが普通だろうがほいほい信用するのは無理だった。ところが、

「ほらほら、早く入って！ 早く！」

御幣さんが戸の向こうから強く急かしてくるものだから、棒立ちでいたぼくはつつい、「ああはい、はい、はい」了解してしまった。

もう半ば諦める感じで、ひと思いにぴよん、

とアルミのドアの敷居を超えた。

どうしても目をつむってしまったので、こっそり開け直す。

中はそこそこの広さの空間で、いささか暗かったものの、どう見ても倉庫で、ずいずい先に行く御幣さんの姿も見えた。ワープはしてないと思って、密やかに、たいへん安堵した。

床の白線で決められた通路を、彼女の背中を追ってくねくね曲がっていく。左右には余すところなく鉄製の大きく無骨な棚が組まれていて、天井近くまで、段ボールや段ボールや段ボールを大小様々載せていた。嫌に窮屈で息苦しい。何となく生臭い。そして空調の音がごうごううるさい。まさに裏側、という感じがした。

やがて、棚の死角を数えられない程折れたところで、「休憩室」とくたびれた札の貼られた、窓つきドアに出くわした。御幣さんはその窓から中をひとしきりのぞき込んだあと、ドアを開けて無言でぼくを招き入れた。

「ほんとに、勝手に入って良いの？」同じことを訊いちゃうぼく。

「良いの良いの、どうでも良いの」

彼女も似たような返事をして、明かりを点けると、誰もいない殺風景な室内に並ぶ長テーブルのひとつへすたすた歩み寄って、載った荷物どもの中の、赤くて帆布地ぽいショルダーバッグに手をかけた。

「誰か来たって、どうでも良いよもう。辞めたから」

「はあ」相槌を打ってから、「……え、なに？」

「辞めたの」鼻つまみ声に仏頂面で、彼女はバッグの中をまさぐって、

「やめた？」

「うん」中からハンドタオルやら化粧ポーチやらを取り出して、

「ぱーとを？」

「そう」調理帽をひょいと脱ぎ捨ててから、すぐこっちへ戻ってきた。

「へえ？」この間、声が裏返ったままのぼく。「いつ、いつづけで？」

「今日」

据わった赤目でそう発すると、すぐ側の洗面台へ向かう御幣さん。「あ、顔洗うから、適当にその辺座ってて」

「辞めた、って、」言われるがまま、一番手前のパイプ椅子へちょいと腰掛ける。「い、今？」

「そう」

「なう？ あの、ぼくの真後ろで転んだ、直前くらいの今《なう》？」

「そう」

蛇口をひねる音がして、彼女の頭が洗面台の中へ沈んだ。「しごとやめたなう」

「おう……」

言葉がそのあと続かなかった。自分の居場所だけでも混乱しているところへ、いきなり斜め上から血みどろな知り合いの「やめたなう」が突っ込んできた格好で、もうなんて言うか、脳みそが、滅茶苦茶を通り越して、ちょっくら真空パックだった。

彼女がじゃぶじゃぶやっている間、すっかり思考停止していたら、背広の胸ポケットのバイブのおかげで何とか気絶をまぬがれた。頭を振りつつ、中からスマホを取り出したところ、ペロちゃんより返信あり。

『pero: おまえから命じられた、イグジット現象からの打開策の検索についてですが』

『結果をお知らせください。やめたなう、くらい分かりやすく』

『pero: 分かりやすく の形容が理解できません』

まあ、死語だし……。

『pero: 要点を平易に、もしくは簡潔に、ということで良ければ、そう努めますが？』

『お努めなさい』

『pero: okay』

『pero: ネットでは、「イグジット現象」は様々な具体性で語られており、わたしによると、言説の中からは、根本的とか、共通的とかいえるような打開策は、思いつきませんでした』

『pero: ただし、一つ確からしいことに、現象に巻き込まれた者は、その現象から「解放された」ということがあります（これと、「体験時間がおよそ一時間以内であった」ことや、「元の場所に帰ってきた」ことや、「生還した」ことは一致しないですが、文脈の過半数はそうです）。なので、逆に、〔おまえが死ななければ〕、おまえが現象から「解放され」、「およそ一時間以内」に、「元の場所に帰って」こられる確率が高まると、わたしは思います』

『pero: 加えて、もう一つ確からしいことに、日本語圏では、イグジット現象は、「どこそこの非常口の通過を前提条件《フラグ》として、数えられる回数、ワープを繰り返す現象」とされていることがあります（ほぼ全ての文脈で、そうです）。なので、逆に、〔おまえがワープし続けることができれば〕、おまえが現象から「解放され」る確率が高まると、わたしは思います』

（ん？ ん？）

頑張って読んだのに、中身が詭弁みたいになっちゃっていて、余計意味不明だった。

『そうじゃなくて！ もう、結論を！ 一行ぐらいでバンと！』

『pero: わかんね。ひたすら非常口くぐりまくればいいんじゃない？』

「ぎゃあお！」

「どしたの？」洗面台から御幣さんが、怪訝そうにこっちを向いた。

「ああいや、ちょっと仕事のメールが……」

誤魔化しつつ慌ててスマホをしまいかけて、ぼくはぬ、とその手を止めた。

彼女に目が釘付けになったのだ。

向こうはすっかり血のりも化粧も落として、鼻に詰め物をしているところだったのだけれども、その、まだ濡れが残った素肌、素顔が、まさしくぼくの記憶にある、高校生の御幣朝美《ともみ》のそれと、たった今、ばっちし一致したのだ。

「〔御幣さん〕だ」

思わず口にしたら、彼女もその意味が分かったのか、ちょっと皮肉笑いをすると、

「じゃあ、これでどうよ」

慣れた手つきで後ろ髪を束ねていたゴムを振りほどいて、さあっ、と肩まで降ろして見せた。

「もっと〔あたし〕っぽい？ この方が」

「もう腹立って腹立って、しょうがなくてさあ、」

鼻の詰め物のせいで若干ふざけた声のまま、ぼりぼり頭を搔きつつ御幣さんは別のパイプ椅子を持ってきて、テーブルを挟んでどん、とぼくの斜め前に座った。

「今すぐ誰かにぶちまけたいんだよね、ほんと。いい？」

「別に、いいっちゃ、いいけど……」なんか、もう、六時までにサポロに帰れそうにないので。

「そのためにぼくをここへ連れてきたの？」

「そ。駄目だった？ やだ？」

「いや、嫌じゃ、ないけど……」ぼくはようやく、このシチュエーションについて飲み込めてきた。「えーと、それはなに、なう仕事辞めた件について？」

「そお」彼女は語気を強めた。

「そ、それ、ぼくで良いの？」素朴な疑問。「第一報はさ、もっと親しい友達とか、いたら彼氏とか、ご両親とかの方が……」

「あたしがキレて勝手に辞めたんだもん。馬鹿らしくて言えないじゃんそんなの」ずい、と身を乗り出してくる。「あんただって、今の仕事、いっときカッとなって辞めてきたとか、親にすぐ言えると思う？」

「そりゃ、そうだけど……」

つまり、彼女は今おのれが非常に興奮していて、冷静でないことはよく分かっているのだ。けれども、これも自ら喋ったとおり、いきさつに憤懣やるかたない部分があったので、「どうでも良い顔見知り」くらいの無害なひとに話を聞いてもらって、適度にガス抜きして欲しかったのだ。そこにたまたま、ぼくがポケットティッシュを差し出しましたよ、と。鼻血拭けよ、と。

これは、間違いない。

ぼくの妄想の産物だ。

きっとちょっと欲求不満なんだろう。そうでなくとも絶賛発狂中なんだし、仕方ないとは思った。そりゃ、もう、ワープするくらいなもの。

「まあ、とりあえず、訊きましょう」

ここは素直に御幣さん（妄想）に付き合うことにした。何回目だろう、気を取り直して、「なんで急に辞めたの？」

「店長がヨメとコドモいるの黙ってたから」

「へえ？」

もうはや後悔した。

一応、確認。「あの一、早速話を整理するけど、んーと？ ここのてんちょうと、ごへいさんは、だんじょのおつきあいをしていたの？」

「うん、そう」

「てんちょうはおいくつ？」

「訊いてどうすんの？」

御幣さん（妄想）に鋭い眼で睨まれる。ぼくの妄想なのに。ぼくの妄想だからか。

「ああいや、全然あらすじを知らないからさ、イメージ掴もうと思って」

「.....三十九、だったかな」

干支が一周しちゃう年の差だ。

「いつからお付き合いを？」

「ここでパート始めてそんなに経ってないうちだから、八ヶ月とか九ヶ月とか、それくらい前かな」

「向こうからいろいろ言ってきて、それで付き合ったの？」

「うん。食事とか、誘ってきて、いろいろ、だんだん」

急に御幣さんは立ち上がって、

「.....あたしも別に、やじゃなかったし」

と言い残すと、ぼくの横を通り過ぎて、部屋の奥のロッカーの方へ行ってしまった。どうも、隣の自販機で飲み物を買っているようだった。年上好きななんて意外だなあ、とか、いや待てよ、そもそも意外だと思うほど彼女にイメージなかったよなあ、とか考えていると、向こうが某《ぼう》微糖の缶コーヒーを両手につまんで帰ってきた。

「ん」片方をぼくに、笑うでもなく差し出す。「ごめん、好き嫌い考えてない」

「ああいや、いいのにそんなの。どうもね」

まごまご受け取って、「.....それで、最初の話に戻るわけか。実は店長、浮気だった、と」

「うん」彼女は元通り向かいに座って、威勢良く缶コーヒーを大半一気に飲みした。「不味《まず》っ」

「なんで浮気だって分かったの？」

「前からアタミに旅行に行きたいってあたしが言ってたんだけど、ゲンちゃん——あっちがあんまり乗り気じゃなくて、なんか変だな、って。あたし、馬鹿だけど、〔こっちが〕浮気されてんじゃないか、って思って、ちょっと気をつけてゲン——相手、のことを、観察してたんだ」

「ふむふむ」ぼくでも分かるくらい、良く聞く話だ。「それで、証拠を見つけた、と」

「うん。一ヶ月くらい前、違うケータイを使ってるのを見た。あたし、惣菜売り場で揚げ物とかつくってるんだけど、うちの知らない黄色いケータイで、だらだら喋りながら真ん前を通り過ぎてったのさ。絶対仕事関係じゃないと思った。それで、ここで、.....あっちを〔誘った〕の」

「え、え？」

彼女も若干言いにくそうだったけれども、高校の頃の〔御幣さん〕しか知らないぼくにはなかなか破壊的な一言だった。動揺しながら、「ここで〔誘った〕って、.....職場の、その、人目につかないとことかで、なに、〔ちょめちょめ〕したの？」

「ちょめちょめ？」向こうが吹き出す。「や、そういうことなんだけどさ。ほんとに最後までする気は無かったけど、そういうっ気があるみたいな、発情してるみたいなふりをちょいちょい不意打ちでやって、あっちを乗り気にさせたの。実際は大して、なんもしてない」

「ハニートラップだ」

「何それ。アニメ？」必殺技的な何かと勘違いされた。「えーと、バリューにいる間は、絶対そのケータイを身につけてるってことでしょ？ だから、抜き打ちであのひとのからだを触って」

じくっても変じゃないようにしたわけ。最近はもう、あっちも結構嬉しそうで……」

「いやいや分かってる、それをハニートラップって言うんだよ。色仕掛けってこと」

「なんだ、そうなの？　――まあ、それで、やっと今日、黄色いケータイを取り上げられたの。あのひとの、ズボンの尻ポケットから」

「じゃあなに、ここヶ月くらいずっと、職場でサカリたい変態の振りしてた、ってこと？」

「ん？」向こうはちょっと考えて、何食わぬ顔で、「まあ、うん」

「おそろしい……」ぼくは心底の感想を述べて、ようやくもらった缶コーヒーに口を付けた。無駄に甘酸っぱ苦いのでコーヒーは大嫌いなものだけれど、これはとにかく喉ごしが冷たかったので許した。「というかすげえよ。そんな演技できるなんて」

「オトコだと、そう思うの？　良く分かんない」褒めたのにつれない反応。「あっちだってこっちを騙してたわけだから、お互い様なだけでしょ」

「まあ、そう言われれば、そうだけど……。んーと、話を戻して、結局あれかい、その黄色いケータイは、家族用だったわけだ」

「うん。そゆこと。――あたしに取られた瞬間、あのひと、すーって顔から血の気引いてった。ちょっとびっくりしたもん。こんなあからさまにすーっ、てなるんだなあって。で、どうやって問い詰めようかって考えたんだけど、それ以前の問題だったわ。待受画面出したら、あの人そっくりな顔した赤ちゃんの写真だったから。……あー、そういうことか、って。全部自分の中で納得いったんだ。だからすぐ、『これ、ゲンちゃんのコドモでしょ？』って訊いた」

「向こうは何て？」

「最初、『いとこの子だ』って言い訳しててさ。『なんで嘘つくの、ゲンちゃんのコドモじゃん』って言っても、白状しないから、『じゃあこのケータイの中身全部見てもいいんでしょ、アドレス帳とかメールとか全部』って言ってやったら、『それは駄目だ、勘弁してくれ』って。やっと全部ゲロったさ。奥さんは同い年で、五年も前に結婚してて、待受の赤ちゃんは一人目で、この春やっと生まれたんだって。『今まで黙ってたのは本当に謝るから、そのケータイ返してくれ』って、土下座してきた。――そこであたし、ぶつん、ときたの」

「うーん」

ずっとぼくが訊いているうちに、御幣さんの語調が少しずつ、不安定になってきた。

「浮気されてると思ってたのに。でも、違った。〔あたしが浮気だった〕。本気のオンナがちゃんという、あたしが浮気だったってことでしょ？　浮気されてるんなら、ちゃんと認めて謝ってくれば、許してあげようと思ってたのにさ、本気なら許すもなんもないよ。〔あたしが許されてない〕んだもん。そう思ったらさ、あたし、馬鹿みたいで。なんでこんなに馬鹿だったんだろう、馬鹿だ、って、急にぶわーって、思って、……」

「うん。うん」

彼女の言葉の中身も不安定になって、しまいにはすっかり泣き出していた。

「もう全部嫌になって、なんか叫んで、そのケータイ壁に投げつけて踏みつけて壊して、店長に『死ね！』って叫んで、ボイラー室から出て、惣菜のリーダーに『今日で辞めます』って言って、もう何も聞かないで逃げてきて、それで……。転んだ。転んじやって、……」

「うんうん、うん。……」

「馬鹿でしょ。ごめんね。馬鹿だ。馬鹿」

「いやいや、馬鹿じゃない馬鹿じゃない」

涙と鼻の辺りがもうひどいので、しゃくりあげる御幣さんへあたふたポケットティッシュを差し出したけれども、「いい」と手で断られた。自前のちり紙をわんさか出して、拭いたりかんだりしている彼女を、しばらく見たり、やめたりしながら、どんなリアクションをしてあげたら良いか、ぼくはかなり必死に考えた。

思いつかなかった。

人生、ちゃんと女づきあいとかなくちゃ駄目だなあ、と反省した。

けど反省してもどうにもならないので、とりあえず、ご機嫌取りの方法を考えた。今度は思いついて、胸ポケットのスマートフォンを取り出した。仮想店舗《ストア》の画面に切り替えて、アプリを一つ、ダウンロードする。千二百円なり。ちょい高い。

下ごしらえがしっかりできたあとで、ぼくは切り出した。

「大体話は分かったけど、仕事辞めた、っていうか、辞める、って言うだけでしょ？」

「店長に死ね、って言って、ケータイ壊したんだよ」まだ涙声で言う。「もう働けないじゃん」

「それはそれ、だんじよのいさかい。でもパートは別の話ってこと。お総菜係って時間配置《シフト》組んであるんでしょ、急に穴開けちゃ悪いんじゃないの？ 御幣さんの食い扶持だってなくなるわけだし、ちゃんと計画立てて、段取り踏んで、もうちょっと後に辞めたらいいのに」

「じゃあ、このままずっと働け、ってこと？」やや非難めいた感じで言われた。

「それでもないけどさ、うーん、店長とはもう、顔も見たくないの？」

「いや、そんなの、」向こうは憮然とした顔で、「分かんないよ。今は全然会いたくないけど、明日とか、もっと先の話とか、なんも考えられない。全部さっきいきなり滅茶苦茶にしたことだから。どういう気持ちになれば良いのか。全然。分かんない」

「うーん」

こっちは唸りつつ、正直に話した。「――ぼく、飲食業《ススキノ》のおねいちゃんとしか仲良くしたことないから、女の子慰めるの得意じゃないんだよね」

「分かってるよそんなの」

「ちょ、即答しないで」発声されたらぐさりと来たよ。「まあいいよ。それはともかくさ。そんなことよりとりあえず、」

ここで満を持してぼくは、スマホを御幣さんへ差し出して、画面を見せた。

「ピアノ弾こうぜ」

鍵盤を模した画面にタッチして音を出すアプリだった。これなら、間違いなく彼女は興味を示して気が紛れるんじゃないか、と思ったのだった。ところが彼女、数秒アプリの画面を無表情で眺めると、そのままじろりとぼくを見上げた。いささか反応、悪い。

「どうしろと？」冷めたふうに、ゆっくりのたまう御幣さん。

「弾くの！ これを！ ポロンて！」なんか後に引けないぼく。「そしてこう、何て言うんだろう、無心？ になる？ さとりをひら一、く一？」最後の方、自分で言っていて笑っちゃった。

「ふーん」

「まずはさ。ね。好きなことやってさ。頭の中一回入れ替えましょうよ。ね？」

「あたし、もうピアノ止めたんだよね」

鼻で笑われた。「一昨年《おととし》くらいで」

「あ、あー？」即座に脳裡へ駄目だこりゃ、と謎のおじさんの声が飛び込む。「あー、……」

墓穴掘りもいいところだ。いよいよぼくは返事に窮した。

意味もなく何度も顔をしながら、こっちがしばし固まっていたら、御幣さんは呆れたように、気の抜けたため息を一つついたあと、短く切ったつやつやな爪の人差し指を一本、ぼくのスマホの画面へ伸ばした。ドなんだかれなんだか、半端なピアノの音が、スマホの端から漏れた。

少し紅のさした細い指が、たたいたりなぞったりする度に、意味のあるようなないようなぐちゃぐちゃなメロディが、ただただぼろぼろ流れていった。

ぼんやり一分くらいそうしてから、彼女は、

「おもちゃのピアノみたい」

とこぼして、また鼻で笑った。

(とりあえず、悪くはないかな) ぼくが内心一安心したところで、

斜め前方の休憩室のドアが勢いよく開いて、

「御幣さん！」

エプロン姿の男が中へ押し入ってきた。

御幣さんはその、オレンジのエプロンを着たホームベースみたいな顔の男のことを振り返って見るやいなや、振り切って不機嫌な声を放った。

「なんですか」

なるほど、これが店長か、と勝手に納得する。

「なんですかじゃないよ。さっき惣菜のリーダーから、辞めるって聞いたぞ。本気なの？」

「だったらなんなんですか？」即返事。

「だからその、いきなり辞めて、どうするんだって事だよ」店長の（ホームベースみたいな）浅黒い顔は硬い半笑いで、若干脂ぎっていた。「今日明日すぐ決めてやることじゃないだろ」

なんかぼくみたいな事を言ってるなあ、と思ったら念が通じたのか、向こうもこっちに目をやる。「――あなたは誰です。御幣さんの知り合い？」

「え、あ、へえ」どうも、と首だけ曲げて会釈する。

「悪いけど、彼女と二人で打ち合わせをしたいんです。ちょっと店の部外者は出てってもらえます？」低音の良い声で、少し高圧的な物言いをされた。

「はあ」

曖昧に返事してから、ちらっと御幣さんの方を確かめると、彼女はぼくに眼《がん》を飛ばしていて、目が合うと、おもむろに、この手からぼくのスマホを奪い取った。

「えっ」

予想外の行動だったので、ぎょっとして彼女を注視したけれど、彼女はぼくのこと、店長のことも無視したように、黙って例のピアノアプリの鍵盤を、両の指で突っつき始めた。どこかで聞いたことのあるような音楽が、時々音程を間違えつつたどたどしく続いていく。

さすがのぼくも、彼女が、「店長と二人きりになりたくない」ようだというのはよく分かったので、ちょっと深呼吸して、「仕事用的人格《キャラ》」にしかとおのれを切り替えて、狂ったついでで、お節介をすることに決めた。

「ああ、あの、」

ぼくは軽く手を上げて立ち上がり、店長にいそいそと歩み寄った。「わたくし御幣さんの知り合いで、たまたま先ほどこちらの店内でお会いしたんですが、実はこういう者でして……」

胸ポケットから名刺ケースを出して開けて、一枚取り出して、つつしんで相手に差し出す。

「はあ？」

向こうは不審そうにその名刺を受け取ると、字面を読むなりさらに首を捻った。「……ホカイドウの、NPO法人の、事務局スタッフ？」

「『北海道貧困救出ネットワーク・ぴゅあらいらく』事務局の稲妻と申します」ペロちゃんに馬鹿にされた団体名をすらすら述べた。そして、「普段は、一人でてめえの飯代も稼げない、どうしようもねえ人間のくずどもをぶっ潰すお手伝いをしてまして」

「」店長、啞然。

「冗談です」と言ってやる。「不適切でした。えーと、ホームレスの方々への炊き出しや、生活

にお困りの方を行政の福祉につなげるお手伝いをしている特定非営利活動法人になります。なので、直接の業務内容とは必ずしも関係ないんですが、〔たまたま〕、出張の折に彼女とお会いしまして、お仕事を退職されたいと言うことで、ご相談を――」

「ちょっと待った、え？」店長が啞然としたまま、動揺の色を見せた。「御幣さん、うちの御幣から、……聞いたんですか」

「聞いたって言うと、具体的には何のことをですか？」

「だから、その、」店長は言葉を濁して、「辞めたいと言い出した、経緯を聞いたの？」

「ああ、はい。彼女の言い分は」ぼくは頭を掻きながら、相手と目を合わせずに、胸元にぶら下がった名札に向かって言った。「それを鵜呑みにすればですけど、彼女と八幡《やはた》さんをこのまま二人きりにすると、彼女の気持ちなり、女性としての尊厳なり、人権なりがなおさら踏みにじられそうな気がするんですよ。まあその、ほら、〔ちょめちょめ〕な事が起こって」

「な、ちょめ、って、」

声色が明らかに狼狽して、断ち切れる。「なんでそう言う話するんだ、おまえっ」

投げかけられたはずの御幣さんから返事はなく、背後でつたないピアノ演奏が続くのみだったので、ぼくもぺらぺら話を続けた。

「少なくとも、こちらを退職するにあたって、彼女に非はないですよ？ 八幡さんが、妻子があることをお黙りになっておられたので、真剣にあなたと男女の交際をしていたわけで、不倫になってでも愛し合おうと願っていたわけじゃあなかった。ですから、あなたの裏切りによって、計り知れない動揺と精神的苦痛を受けて、ここで仕事するのはもう耐えられない、となったわけです。そうすると、彼女の退職の責任は、全面的に、あなたにあるということですよ？」

「いや、そういうことじゃない！」上目遣いにちら見すると、八幡店長はだいぶ気色ばんでいた。おっかないのでまたうつむく。「確かに俺には妻や子供がいる。それを言わなかったのも本当。それは心から詫びたいと思ってますよ。でもまだ、話に続きがある。だから二人で話したい、って言ってるんだ。関係ないじゃないか、あんたは！」

「はあ」さらりと受け流して、「わたしは彼女の知り合いなので、関係なくはないんですよ。二人でないと話されないお話なら、いっそ話さないでいただきたいです。話の続きって、何ですか？」

「だから、それは！」

「離婚するって事ですか？」向こうが詰め寄ってきたので、すばすば話を進める。「仲良しの奥さんと可愛いできたてのお子さんとお別れして、こちらの御幣さんと一緒になりたいというお話ですか？ それならそれでいいんですけど、今のあなたの言葉を、わたしはともかく、御幣さんに信じてもらうことができるだけでも、そんな軽々しくお考えでらっしゃるんで？」

「ちょっとあんたは黙れよ！」

「あーもういづれにしる、」ぼくもちょっと声を張って、「法的措置ですね、これ」

「」

店長の言葉と一緒に、御幣さんのピアノの演奏が消え失せた。

「あなたがもし今の奥さんと離婚して、彼女と結婚を前提に交際するというのであれば、それを今から書類にしてもらって、公証役場に行って公的な証明をつけましょう。もし約束を破ること

があれば、役所のお墨付き文書なんで、立派な証拠になって賠償請求しやすいので」

「な、何言ってんだ、おまえ」

「逆に、そうじゃない、離婚する気は無い、別れてくれ、っていうんなら、これも今からわたしが弁護士を彼女に紹介して、すぐ慰謝料を要求する裁判を起こさせましょう。どうせ彼女のケータイにあなたからのすんごいメールとかが残ってるでしょうから、きっこっちが勝てますし」

「っさ、裁判、って」

地黒なひとの血の気がひいても、ちゃんと分かるんだということを発見しつつ、まだ続ける。

「お金がもらえるかなんて正直どうでもいいんですよ。弁護士代くらいせしめられればね。それよりか、今の奥さんに、あなたが不倫してた、って分かってもらうのが大事です。しかも相手には不倫だって知らせず両方騙してたんだって。いやあ、わたしが奥さんだったら、御幣さんには同情しちゃうし、うーん、やり方はともかくあなたのこと、半殺しにするんじゃないですかねえ」

「ちょ、おい、ちょっ、」

「あ、こういうパターンもありますよね。離婚はしない。でも愛してるのは御幣さんなので、これからは堂々と不倫しよう、とか。なんか無駄に漢《おとこ》らしくて良い感じですよんね。まあ、そのときは正直、彼女次第ですよんねえ。許すか許さないかは。でもどうなんですかね。人の道に外れた道に自分のオンナをそそのかす野郎って、ぼく良く分かんないですけど、どっちかって言うと、うーん、〔くず〕、なんじゃないですかねー？」

「……っ、てめえ、黙ってきいてればあああああああ！」

ぼくがノリノリで喋っていたら、急にキレられて、胸ぐらを掴まれて凄い力で引き上げられた。忙しいことに、店長のお顔と目の血管は真っ赤になっていた。

「何も知らねえだろうが！ 関係ねえだろうが！ てめえはよおおお！」

これだけでとくに痛苦しいので、ぼくはたまらずひと吠えした。

「ようし、通報しましょうかあっ！」

向こうが振りかぶった拳が、直後、引きつったようにして止まった。

「いいですよさあぶん殴ってください！ 警察呼びますから！ いやあどうしますか、どうやって説明しますかこの状況！ あんたが加害者だから、当然家族も呼ばれますよねえ！ ぼく、お巡りさんにも奥さんにも全部ありのまんまを喋りますよ！ 他の店員さんにも分かって騒ぎになりますよねえ！ 今の立場のまんまここにいられるんですかねえ！ さあ！ どうします！」

「なっ、なっ、……なっ、……な……、」

八幡店長はもう「な」しか言えなくなっていて、電源が落ちたようにぼくを無造作に解放すると、張りのない脂まみれのカッとした顔のまま、歯を食いしばりながら、見開いた眼で殺そうとしてきた。当然すぐに視線をそらした。

大体ぼくのお節介は終わったので、御幣さんのいる後ろを向いた。

彼女はパイプ椅子に座ったままとにかく唾然としていて、なんか、こちらに対する畏怖の気持ちが見て取れた。要するにすごくヒいていた。ぼくは我に返って、慌てて、

「とまあなんていうか、こんなかんじなんだけど、ど、どうしよう？ 御幣さん。どうする？」

「ど、どうする、って、あんた、そんな……」

御幣さんはそこまで口にして、しばらく絶句したあと、三分くらいまごつくぼくと、震える店長を代わりばんこに眺めたあとで、たいへん長いため息をついて、ようやく答えを出した。

「うん、まあ、店長とは、別れるわ」

です

御幣さんは、もうちょっと店長がどっしりした、包容力のあるひとだと思っていたらしく、ぼくの悪意やはったり満点の挑発にまんまと乗ったことや、結局奥さんとのことをどうするか言い切らなかったことで、すっきり愛想を尽かせたらしかった。

まあ別れるのは良いとして（ふりんはよくないとぼくはおもいます）、御幣さんがパートも今日で辞めると言って聞かないので、ぼくから店長へ、今後彼女が一切これまでの関係を他言しないことを条件に、彼女を「自主退職」ではなく「解雇」扱いにするように持ちかけた。

「なんでそんなことすんの？」当然御幣さんは納得しない。「あたしが辞めたいって言うてるんだから。わざわざクビにする必要なんか……」

「久遠グループはご立派な企業なので、バリュダックスでも、パートの従業員さんにちゃんと雇用保険かけてますよね？」憮然と壁にもたれかかった店長へ訊く。「であれば、ある程度働いてから辞めれば、国から失業手当がもらえるじゃないですか。……店長さんならこれで、言ってる意味、分かりますよね？」

「意味は、分かる」一段と低い声で、向こうは唸った。「けどね、解雇だと、本部に理由を付けて伺いを立てなきゃならんよ。場合によっちゃあしつこく突っ込まれるんだ」

「あっさり『作業効率が悪く、従業員のとしての適正を欠くため』とか書いとけばいいんじゃないですか？」

「だから、なんでクビにこだわるの？」

御幣さんが置いてけぼりで不機嫌になってきたので、ぼくは缶コーヒーを最後まで飲んで、洗い顔をしながら解説した。「失業手当だよ。自分で辞めた場合だと、役所に申し込んでも何ヶ月か待たされるでしょ。でも解雇ならさ、何日もしないうちに最初の手当が出るわけ」

「はあ。しつぎょうてあて」始めて聞いたような顔をされる。「もらったことない、そんなの」

「え、仕事辞めるの初めてじゃないよね。手続きしたことないの？ じゃ仕事見つかるまでの間、どうやって暮らしてたの？ これまで」

「そうだなあ」斜め上の宙を見ながら、「友達におごってもらったり、絶食したり……」

「ギリギリ過ぎじゃん」風任せも良いところだよ。「ちゃんともらえるものはもらっといた方がいいよ。そのための制度なんだから。ましてや今回なんてこのひとのせいなんだから、ちょっとぐらい融通きかせてもらってもいいと思わない？ 違法だけど」

「ん、違法？」

「うん、違法。事実と違うのに解雇されたって言って手当もらうんだから、不正受給だよ」

「……」

どうも、一瞬で御幣さんのぼくを見る目が冷えた。「さっき、店長に、人の道に外れたところにオンナをどうこうするやつは、どうとか、言ってなかったっけ？」

「はえ？」

そう言えば、勢いに任せてそんなけしかけ方をしたような覚えがあった。のを思い出して、声を上ずらせつつ、「ま、まあ、そういうけじめのつけかたも、いほうだけど、あるかなー、って

ことで、じっさいどうするかはおふたりにおまかせしますよ。おまかせ。ねー？」

ちょうど話が一段落したところで、仕事用の携帯に連絡が入り、店長が何か言いたげな恨めしい目つきをしつつ、そそくさ休憩室を出て行った。御幣さんが、

「はあああ」

と声を出してため息をつき、パイプ椅子の背もたれにのけぞる。「なんか凄い一日だったな」「そうっすね」ぼくもです。別の理由で。

「しかし、あんた凄いね。よく考えたらさ、あんた、さっきのって、店長脅してたんでしょ？」

「脅して言うか、揺さぶりのつもりだったんだけど……」そんな風に見えたのか。

「NPOって、良く聞くけど、ヤクザみたいなもん？」

「違います」

ここ大事。すごく大事。「日本の明るい未来のために、お金にならないお仕事してます」

「ふーん。あたしはやめとこ」全然信じてもらえなかったらしかった。「——あ、これ、返す」

勢いつけて立ち上がった彼女が、ひょいところちへスマフォを投げる。

「わっ、ちょ、」必死で手を伸ばしてそれをキャッチ。「壊れたらどうすんの。仕事にならないんだから」

「へへへ」

すっぴんの御幣さんが屈託なく笑うのを、この日始めて、そして久しぶりに見た。ぼくは何となく、

「なんでピアノ止めたの？」と訊いてみた。

「ん？」彼女は少し間を置いて、自嘲気味に、「プロのピアニストになりたかったんだけどさ、そんなうまくいかないわけよ。音楽の大学出ただけで良い、ってわけじゃなくて、もうアーティスト、って感じのピアニストになるんだったら、大きなコンクールで賞を取らなきゃいけないのね。国際的な。あたし、まず、外国語がだめでね。親にも見放されてるからお金も用意できなくて、留学できなかった。いやいや、そんなのどうでも良いね。才能ないの。才能」

「さいのう」高度な話だなあ、と思った。

「なりたいたけじゃなれないんだよ、当たり前のことなのにね。元々あって、それを磨いていかないと、才能って出来てかないの。けど、あたし、学費バイトで稼ぐのとかにかまけて、ううん、それも違うな、音大行っただけで、もう『ピアニストになりました』って考えちゃったんだろうなあ。だから、元々大して才能ないのに、真面目に練習しなかった。打ち込まなかった」

「ふむん」

「だから評価されなかったの。……大学出たあとも、ピアノでご飯食べてく方法をいろいろ考えたんだよ。バイトしながら。ピアノの先生の試験受れたり、知り合いのバンドのキーボード弾きとか、イベントで弾く仕事とかやったり。路上演奏《ストリート》も一時期結構やったな。でも、なんか、全部、思ったのと違った。『こんなのなりたいた自分じゃない』って思っちゃった。で、あるときやっと気づいたんだ。あたし、この程度の人間なんだ、って。願望に努力がついてこない、妄想止まりの人間なんだ、って。そしたらばっ、って、なんか止めちゃった」

「なんか、良く分かんないけど、……芸術的だね」

「何が？」

「ごめん、自分で言っても意味分かんない」何というか、こう、込み入った感じというか。「でも、とにかく、ピアノ弾くのが嫌になっちゃったってことでしょ」

「んー、まあ、そんなとこかな」

「さっきはどうだった？」

「え？」

「ほら、これ」おのれのスマホを振ってみせる。「良い気晴らしになった？」

「まあ、なったと言え、なったけど」

「じゃあ、気晴らしにピアノ弾けばいいのに」

「はあ？」何言ってんの、という感じで遠目に見てくる御幣さん。

「気晴らしにはなるんでしょ。プロはプロで諦めて、好きな曲適当にちゃんちゃら弾けばいいのに。で、それ動画に撮ってネットで流すとか。折角ピアノ弾けるんだからさあ、もったいない」

それこそ適当な事を言って励ましていたら、いきなり、掲げていたスマホがバイブし始めた。ずっとぶれ続けるので、ペロちゃんのメッセージではない。電話の着信だった。

ひっくり返して画面を見ると、電話の発信者の欄に「チーフ」の文字があった。

その三文字を認識した瞬間、全身にさっと悪寒が走った。チーフ、すなわち、ぼくの直属の上司である。慌ててスマホの時刻表示を確認する。17:28。目の前がぐらぐらし始める。

あと三十分後の、交渉の話に違いない。

(どうしようどうしようどうしようどうしよう)

ぼくは何にも考えないまま画面の応答ボタンを押して、とにかく、返事をした。「はい、」

『稲妻くーん？』聞き慣れた陽気な男性の声がした。『稲妻くーんでーすかー？』

「はい、そうです」

『こちら、里塚《さとづか》チーフでーす』

「そうですね。どうも」

なんだか狐につままれたような顔をしている御幣さんに片手で断りを入れながら、うろたえまくりのぼくは、チーフに遅刻の交渉をすべく、こそこそドアを開けて休憩室から出ようとした。

「お疲れ様です。どうしましたか？」

『うんー、ちょっと機材の調整で分かんないところあってさー。あ、今どk

電話の音声途切れた。

ドアから出た先が外だった。

ぶー、ぷー、ぷー、という終話音が耳の側でしばらく続いて、それも切れた。

右の頬から目の前を左の頬へ、かさかさした、冷たい空気が流れて行って、そのあと、しんしんとした夜闇と静寂が目と耳を覆った。目の前はアスファルトで舗装された細い通りで、まばらな間隔の街灯と、建物の明かりがささやかに景色を浮き出させていた。

道を挟んだ向かいには、長く続く落書きだらけの壁、その奥に空き地、その向こうにぽつぽつとオレンジの光の群れがあって、思い切り左右に首を振ると、二階建てや平屋の家々がでこぼこ並んでいた。見たところ、ただの街の郊外だった。

けれども、違うのだ。

地味で穴みたいな窓、明るくてばらばらな壁の色、とにかく四角い建物。そして誰一人外にいないくらいの、夜。

絶対日本じゃない。

(しまった！)

ぼくは遅くも遅く察知した。あのバリュダックスの従業員休憩室には、あのドア以外、ひとつも出口や窓がなかった。つまり、〔休憩室の中からは、あのドアが非常口〕なのだ。多分あのドアの上にも、例の誘導灯がついていたに違いない。

そう、つまりたった今、またどこかにワープしたのだ。

(戻んなきゃ)

まず頭に浮かんだのがそれだったので、ぼくはすぐに、出てきたばかりで開けっ放しの古びた木製ドアの中の闇へ駆け込んだ。

出た先も外だった。

そして大騒音だった。

ものすごく白んだ空の下、背後と目の前の雑多でくたびれた低層ビルに挟まれた狭い路地を、ひさしやパラソルが半端に覆って、そこを、ひしめくようにアジアのひとが行き交っていた。見渡す限りの建物がほとんど商店で、果物やらお鍋やらとにかく何かを盛ったり釣ったりして、これまたアジアのひとが座って売り子をしていた。そして、極めつけに、看板や垂れ幕がことごとく、漢字で、漢字で、人々の話し声がイイシャンペエペエとしか聞こえなかった。

「チャイナ！」

悲鳴をあげて、ぼくは一目散に先程の夜道へ逃げ戻った。

「なんでまた、チャイナが出て来るんだよおっ」

もう嫌がらせとしか思えなくて、息を切らして毒づきながら、ドアの脇の壁に背をつけ、ずるずると座り込んだ。息が整うまで待ってから、覚悟を決めて、握っていたスマートフォンを目の前に持ってくる。

『ペロちゃん？』

『pero: ¿hola?』

もうご挨拶のハテナマークからしておかしな事になっていた。

『あのさ、ぼくの今いるここ、どこ？』

『pero: おまえが自分で確認すれば良いのでは？』 変わらぬ冷たさ。

『pero: ペロちゃんから訊きたい気分です。教えてください。簡潔明瞭に』

人工無能は、何の気配りもなく、即座に返事してきた。

『pero: メキシコです』

「……」

ぼくは見える限りの夜景を今一度ぐるりと確かめたのち、人工無能に訊いた。

『ここ、どこ？』

『pero: メキシコです』

ぼくは、一度目を閉じて開けて、視界が変わらないのを確かめたのち、人工無能に訊いた。

『ここどこ』 『pero: メキシコ』

質問と同時に回答が来た。ぼくの考えは完全にお見通しだった。

『pero: です』

『いじめないでくださいなきそうです』

後編予告

『pero: 日本（西東京市）からメキシコ（チワワ市）へイグジット現象でワープしてしまったご主人。そこで運悪く真夜中の麻薬カルテル抗争に巻き込まれます。果たしてご主人の運命やいかに？』

『pero: そして、メキシコから日本（稚内市）へ転送されたご主人が実家で見つけた、ある真実とは？』

『pero: そして、日本からタンザニア（セレンゲティ国立公園付近）へ放り出されたご主人。サバナのど真ん中で携帯回線が使えなくなります。迫り来る野生動物。どこにもない非常口。ご主人は見事切り抜けられるのか？』

『pero: そして、タンザニアの先には廃校舎が待っていました。位置情報が取得できない謎の空間です。ご主人はイグジット現象からいよいよ脱出できるのか？ お仕事の時間に間に合うのか？

いいえ、少なくとも、間に合いませんでした！』

『pero: 次回、中編小説「イグジット」後編、どうぞご期待ください！』

『ペロちゃんさ、予告ってレベルじゃないよね？ 大体あらずじ喋っちゃったよね？』

(後編へ続く)

作者です。

「イグジット（前編）」を最後までお読みいただき、ありがとうございました。まずは心より御礼申し上げます。

さて、この作品はタイトルの通り、未完の作品であり、しかも、後編の制作に着手することさえ未定になっているものです（ですので、この文章を「なかがき」としています）。後編が完成し、それを公開させることが出来るかどうか、これを書いている今は、全く分からない状況です。早速ですが、前編を楽しくお読みいただいた方々には、その点深くお詫びさせていただきたいと思います。

そんな作品にもかかわらず、公開に踏み切ったのは、わたくし小河の個人的な都合、具体的には、健康の問題のために、小説を書いて発表していくことそのものが困難になりつつあったからです。このため、主に作品を公開していたウェブサイトが無期限の休止にすることとし、休止前の最後の作品として、いわば「閉店中のお店のシャッター的なもの」として企画されたのが、この作品だったのです。しかし、本当は完結させて公開するつもりだったところ、思いのほか体調が優れず、前編を完成させるどころまでが今の気力では限界であると判断しました。ゆえに、活動の休止にあたって、せめてまがいなりにも企画を貫徹したいと思い、前編のみの公開に至った、ということなのです。

後編予告にあるとおり、あらすじはほぼできあがっており、書く時間と、体力、気力さえ戻ってくれば、おそらく完結させられる作品であると思っています。なにぶん心身のことですので、それがいつになるのか、二度と来ないのか、それは自分でも分かりません。けれども、筆を折るとか、そういうつもりなのではなく、「書くこと」自体は養生中も続けていくつもりでいます。

ウェブでの活動を再開するときは、必ず「イグジット（後編）」の公開とセットにしたいと考えております。もし、前編を楽しんでいただけましたなら、どうか心の隅の隅の隅っこくらいで、それを密かにご期待いただければ、作者としてそれ以上の幸せはありません。どうぞよろしくお願いいたします。

最後に、余談として、この作品執筆時に愛聴していた「BGM」をご紹介します。僕は一つの作品の執筆時、必ず一つまたは複数の「主題歌」を決めて良く聞くようにしています。これらの曲を聴きながら読んでいただければ、より作品世界が豊かになるかも知れません。よろしければ是非お試しください。聴き始めた順に挙げていきます。

- (1) The Shock Of The Lightning - Oasis
- (2) You're In a Cage - OCEANLANE
- (3) Rum Hee - トクマルシューゴ
- (4) Lahaha - トクマルシューゴ
- (5) Her Morning Elegance - Oren Lavie
- (6) Fireflies - Owl City
- (7) 新しい文明開化 - 東京事変

- (8) 絶対値対相対値 - 東京事変
- (9) カプチーノ - ともさかりえ
- (10) 都会のマナー - ともさかりえ
- (11) タリンス - ともさかりえ
- (12) Memory - Zoot Woman
- (13) 銀河 - フジファブリック
- (14) 夜明けのBEAT - フジファブリック
- (15) パッション・フルーツ - フジファブリック

改めてまとめてみて驚いています。アルバム一枚分「主題歌」をつくってたんですね、自分の中で。ちなみに、特に洋曲については、ネットで話題になっている曲をつまみ食いしただけですので、音楽にはちっとも詳しくないです。

それでは、重ねてになりますが、最後までお付き合いいただき、本当にありがとうございました。そして、しばし、さようなら。

二〇一一年八月一五日

小河彰護

イグジット（前編）

<http://p.booklog.jp/book/32372>

著者：小河彰護

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ogosyogo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32372>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32372>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.